

# The boy and the bee photo: Takeshi Miyamoto text: Koky Saly



The boy and the bee 写真 / 宮本 武 文 / Koky Saly

子どもの頃、自分がどこの出身か聞かれると、いつも戸惑ってばかりいた。学校の先生からその質問をされると、いつも「オーストラリア」と答えていた。だって、その答えしか知らないし、理解できなかつたから。なんで僕の隣に座っている金髪の男の子のように、普通に「オーストラリア」と答るだけじゃだめなんだろう。僕の頭の中は毎日その疑問でいっぱいだつた。それを考えるたびに、両親が持つとうもろこし畑に行って、畑の真ん中に寝転がってオーストラリアの空を見上げていた。僕の隣にはいつも、ぶんぶんと飛び回っている怒ったミツバチがいて、そのミツバチを赤いマッチ箱に捕まえて遊ぶのが日課だった。マッチ箱の中で暴れるから、逃がしたらすぐに刺されるだろう、というのはわかっていたけれど、ミツバチの鳴く声が心地よくて、別に刺されてもいいやと思っていた。ミツバチと本當によく遊んでいたと思う。10歳だった僕の頭の中では、僕とミツバチは何か宇宙的

なもので繋がっているとさえ思っていた。本当はミツバチになりたかったんだ。誰かが僕を怒らせたら、すぐにどこでも飛んで行って、その子を刺せるから。

ミツバチがぶんぶんと鳴く声を聞きながら、僕は自分の過去について考えていた。自分がどこで生まれたのか、どうやってオーストラリアに来たのかさえ知らなかった。なぜ両親は僕と僕の兄妹にそのことを話してくれないんだろう、と不思議に思っていた。僕たち子どもは大抵の場合相手にされていなかった。学校の成績以外のことは、聞く耳さえ持ってくれなかつた。良い成績を取れば何でも許してくれて、悪い成績だったら叱られるのはわかっていた。でも僕が本当に知りたかったのは、僕たちがオーストラリアに来る以前のことを、なぜ何も教えてくれないのかということだった。自分たちがどういう人間で何をしているかという根本的なことが、僕らの家族の生活から全て忘れさせられていた。僕がわかる範囲では、

















両親は幸せそうではなかったし、僕自身も幸せじゃなかった。それでも家族みんなは、自分たちの過去について知ろうとしなかった。時々ほっとしたり、がっかりしたことがあれば、僕はいつも畠に行って大の字に寝転がって、大きな空を見つめながら空高く飛ぶミツバチに色々なことを聞いた。全部の質問が終わった後で、友達になったミツバチを放してあげて(その頃には10回も刺されていたけど)、歩いて家に帰った。いったい僕はどこでどうやってその答えを見つけるんだろう、と思いながら。

人は誰でも秘密を持っている、ということに気がついた。電車で隣に座っている普通の人も、きっと秘密を持っている。夫、妻、母親、父親、親友。誰でも人に言えない秘密を持っている。いつも自分の中に隠して、誰にも知られないようにする。普通にできなくても、普通を装って平気な顔をしている。過去の辛い出来事を乗り越えるには、それと向き合わなければいけない、とみんなが言う。だけど、誰もそんなに簡単に割り切れるとは思っていない。だから結局のところみんな、自分ではない誰かになりきるしかないんだ。本当の自分を隠して、現実に適応できるふりをする。悲しい時でも幸せな顔をして、しかめっ面をしたいのに引きつった笑顔をつくって、少年なのにミツバチのふりをしてここから逃げようとする。

僕の両親は他の誰よりも秘密を隠すのがうまいと思う。彼らから何かを教えてもらうのは、世界の貧困と飢餓を無くすのと同じくらい難しい。そんな僕の両親がほんの少し明かしてくれた秘密。それは、もっと早く明かされるべきものだった。僕は大人になるまで知らなかっただけで、僕は誰もが予期出来ないほど、予想をはるかに越えた幸運に恵まれていたんだ。

＊＊＊＊＊

彼女はまだもがいていた。暗闇の中、火傷で負傷した目をやっとの思いで開いてみると、ぼんやり古い寺院の影像が見えてきた。冷たい石畳の上に唇を押し付けながら、彼女は這いつくばって中に入ってしまった。何とか涙をこらえながら仰向けになった。

見上げると、爆弾で破損された寺院の壁がフレームとなって夜空の絵画を見ているようだった。それは寺院の屋根が崩れ落ちた跡だった。月の光が過去を照らす。星空が彼女に歌いかける。でもその瞬間に聞こえたのは泣き声だった。赤ん坊の。自分の子供だということがまだ信じられない。彼女は這いつくばるのをやめて、石のように静かに全身を休めた。

時：1976年11月28日、午前3時頃。

場所：カンボジア、シェムリアップ州のアンコールワット寺院から約20キロ南東、コーキー寺院にて。

僕は寺院で生まれた。その寺院はコーキー寺と呼ばれ、3歳までの間(内戦の間)、強制収容所であったその寺院で、僕は母親と一緒に時を過ごした。

＊＊＊＊＊

全身の感覚が無くなつてからどのくらい経ったのだろう。つま先、股、お尻さえもう何も感じない。体中をつまんでも急所をつまんでも何も感じない。この最悪な酔いに加えて全く眠れないし、隣ではいびきをかきながら寝ているおじさんがいるから、トイレにも行けない。かなり最悪な旅になってきた。しかも高所恐怖症ときた。ボートに乗れるのだったら乗っていたけれど、でも海と僕との相性もかなり悪いんだった。以前、勇気を出してボートに乗ったときは、結局朝食で食べたものをインド洋にすべてきれいに吐いてしまった。6年前のことだ。

今、僕は高度1万キロの上空にいる。ボーイング767機の韓国人ツアー客と一緒に。目的地はアンコールワット遺跡。世界最大の宗教遺跡とも呼ばれている場所。最興期には現在のタイ、ベトナム、ラオス、ミャンマー、中国の一部をも支配した王国であり、王神が支配した国。アンコールワット寺院は熱帯地の中に凄まじく立ち誇り、カンボジアの決定的な観光産業の的であり、またかつてのカンボジアを長く発展、安定させてきた平和の象徴だ。

カンボジアのクメール族にとって、アンコールワット遺跡は国宝であり、彼らの誇りだ。カンボジアが過去

にどれだけ栄えていたかという教訓であり、現在では  
はかない夢であると共に、限りない希望を与えてくれる。遺跡の像は誇り高く、カンボジアの国旗にも描  
かれている。天へと貫く五つの塔。そしてその神聖な  
土地に身を委ねる。神々が世界を彷徨った時に、足  
を運んだ土地。僕はいま、自分の足でその地に立と  
うとしていた。

イヤフォンからAlicia KeysのKarmastitionと  
いう曲が流れている。外は真っ暗だ。僕の下には、  
まだ闇と未知に包まれた、カンボジアという土地が  
広がっている。時計の針は夜10時半を指し、そろそ  
ろ着陸だ。1980年、僕が3歳だった時以来、まだ  
この土地に戻ったことがない。当時、僕と家族が奇跡  
的に死を免れた場所に、帰ろうとしている。考  
えるだけで、不安になる場所。今後も必ず「どこか危険  
な場所」という感覚がつきまとうだろう。でも僕は  
ここに2つの理由を持ってやって来た。一つは長年  
思い描いていた、自分の祖国に学校をつくるという  
夢を実現させるため。2つ目は、僕が知りたかった  
謎について答えを探すため。ミツバチや僕の両親、  
そして神様でさえも教えてくれなかつたんだから、自  
分で何か見つけないといけなかつた。両親が隠した  
秘密を解くのは、そんなにたやすいことではないかも  
しれない。でも少なくとも、最初の一つだけはすぐに  
解き明かすことができた。僕には隠し玉があつたん  
だ。空港で僕を待ってくれた人は、僕の両親が  
隠していた秘密そのものだった。そこにいたのは僕  
がまだ会つことのない兄だった。

シェムリアップの空港は、僕が行ったことのある  
他の空港よりもかなり変わっていた。途上国の空港  
だから小さいだろう、というのは正しかつた。でもこん  
なにまで入国審査でもめるとは、想像もしなかつた。  
本来カンボジアに入国するには、20ドルの観光ビザ  
が必要で、毎月の更新が必要だ。まあ長期滞在の  
場合は、お金を支払っただけ長く滞在できるのだけ  
れど。でも僕が少しばかりのクメール語を話すと、急  
にみんなが優しくなつた。「自分が生まれた国に帰る  
んだろ、ビザなんか要らないよ」と、すぐに永久ビザ  
と無期限の再入国許可証のスタンプを押してくれた。

残存期間には永久と記されていた。しかもタダで。

それは僕にとっての最高の出来事だった。それまでの不安がすべて消えて、カンボジアが大好きになつた。  
僕の家族が生まれた場所の人々は、こんなにも優しく、親切なんだ。外国人として扱うのではなく、カン  
ボジア人として対応してくれた。そしてカンボジアの  
再建のために、僕に手伝ってほしいと望んでくれた。  
それは僕がまさにそうしようとしていたことだった。

入国審査が終わって、税関に進んだ。僕の永久  
ビザを見たとたん、入国審査室に戻されて、そのあと30分もいろいろと聞かれた。永久ビザをくれた優し  
い審査官が教えてくれた通り、知らないふりをして  
黙っていた。好運にも、すべてうまく行った。結局、  
税関には賄賂としてお金を要求されたけど、払わずに済んだ。でも、僕の不安はすぐにまた戻ってきた。  
結局のところ、カンボジアという国はそんなにすばらしいところではなかつた。僕はカンボジアの再興に  
一番問題となっている政府体制の崩壊を、この国に到着してすぐに目のあたりにした。

その日の夜は最低だった。空港の到着ロビーで  
2時間も待ったのに、兄は来なかつた。結局タクシー  
に乗って町で降りたところで、雑種の番犬に吠え  
られて、どこかの細い路地まで追いかかれた。持  
っていたポテトチップをあげたらすぐにおとなしくなつたけれど、結局番犬でもなんでもなく、ただお腹が  
空いているだけの犬だった。やっとのことでホテルを見  
つけたものの、翌朝かなりの料金をボラレてしまつ  
ていたことがわかつた。カンボジアに来るみんなには  
忠告だけれども、この国には外国人料金が設定され  
ていて、ローカルたちは観光客からお金をたかろうと  
する。さんざんのあげく、やっと小さなレストランで  
夕食にありつけた。壁には何匹ものイモリが這いつ  
くばったり走ったりしていて、こんなに素敵な夜は久  
しぶりだな、と苦笑した。

シェムリアップの町は観光地としてとても栄えてい  
る。アンコール遺跡を見に来る観光客でごった返し  
ていて、街には新しいホテルや民宿が毎週のように開  
業し、常に次のものが建設されている。道路事情も  
毎年改善されて、半年ごとに新しい道路が目につく。

メインの通りには観光客のドル目当ての土産物屋が立ち並んでいる。インターネットカフェも、東京で見つけるよりもすぐに見つけられるし、1時間75セント、とかなりお得だ。街ではカンボジア通貨のリールと米国ドルが相互に使用されている。もしそのどちらも持っていないなかったとしても、家族経営の両替場所が街にたくさんあって、そこですぐに助けてくれる。10年前5千米ドルで買った土地は、今となっては20万米ドル、とかなり値上がりしている。街は近郊の村から出稼ぎに来たローカルでごった返していて、すぐには誰に就けないから、みんな物乞いから始める。教師や警官の月給は約30ドルだ。ほとんどの家庭はそれなりの暮らしをしているけれど、今は中国市場が落ち気味なのでそれほど儲かっていない。道路事情を見れば、この街の成長ぶりはかなり混沌としているのがわかる。ガソリンスタンドはスクーターでぎゅうぎゅう詰めで、観光客が使うには一苦労するかもしれない。たいてい、家族全員がスクーターに乗って移動するのがほとんどだ。お母さんが膝元に赤ん坊を抱えて授乳しながら、お父さんが頭に買い物袋をのせて運転していたり。ここでは、一人で交差点を渡ることだけは気をつけた方がいいと思う。観光客用にはトuktukが使われていて、マーケットやクラブバーの前にはトuktukの運転手がむろしている。砂はこりがひどいものだから、道路を歩いているだけでどこかのビーチを歩いた気持ちになる。ほこりまみれになった顔を拭いて、やっとのことでシバタ通りの道ばたに座り込んだところで、僕の兄は突然現れた。オープン型トラックに乗って。それはボロボロで、後部タイヤはパンクしてマフラーは地面についでいた。

兄は黒くて固い天然パーマの髪の毛を七三に分けていた。カンボジアの日差しのせいで、皮膚はとても黒かった。唾を歯の隙間から吸い上げる癖を持っていて、そのイヤな音を聞くと、次にいつまたやるのかと考えて、ちょっとうんざりした。彼がいつも着ている黄色いマンゴ色のシャツは、肩幅よけかなり大きくてルーズな感じだから余計しおれた感じがした。いつも黒あせた色のパンツにサンダル姿で、足にはたこができていた。鼻は大きく、目も大きくてアーモンド型、唇は厚く、いつも甲高い声で楽しげに笑っていた。兄の名はオーウェン、彼と再会の抱擁を交わしたとき

には、嬉しさとぎこちなさと、悲しさが混ざっていた。会ったことのない兄弟に初めて会うのは、本当に妙な気分だった。血はつながっているから身近に感じはするけれど、一緒に時を過ごしたり共感したりすることがなかったから。彼は完璧にいろいろお世話をしてくれたけど、やっぱり僕の両親のように、自分の秘密は隠していた。彼なりの理由があるからだろう。兄は自分の住んでいる家を僕には見せてくれなかった。むしろ僕に対する何かしらのねたみを、兄から感じずにはいられなかった。結局のところ、オーストラリアで裕福に暮らした自分のほうが幸福だったのかもしれない。

最初に訪れた村は、シェムリアップから20キロ北に離れた、ソフィー村という村だった。特に何も変わったことのない村だけど、5年前に父親と話したときに、この村には必ず行けと言われていた。この村が、僕のプロジェクトの第1校目の候補地だった。父親に初めて、カンボジアに学校を作りたいと打ち明けた時に、父はすぐにカンボジアと連絡をとってくれて、学校を作るという目的だけのために、僕に土地を与えてくれた。父が言い忘れていたのは、僕が生まれたコーキー寺は村から10分ほどのところにあって、戦争のときはソフィー村の長老たちが、僕の両親を救って隔離してくれていたということだった。

ソフィー村は小さい村で、約2千人の村人たちが牛と鶏を飼いながら暮らしている。この村で暮らした経験は、今までの僕の人生の中でも一番ハードなことだった。お湯も電気もなく、水洗トイレもない。原始人のような暮らしぶりで、おまけに火を自分で起せなかったから、だめな気分になった。そのうえ、日差しは強いし、スコールが降るからもっと大変だった。でもとても素敵な体験もしたと思う。それは学校づくりのあいだ、片時も離れず子供たちと時を過ごしたこと。ブロックを積み上げるときも、セメントを運ぶときも、米を植えて、水牛車に引かれて稲の上を動くときも、常に一緒。野菜を買いに行ったり、絵を描いて色を塗ったり、夜空の下で歌い踊ったり。夜空を真っ二つに分けるような大きな流れ星も一緒に見ることができた。すごく才能のある子供たちばかり

だった。ピカソのような絵を描く少年、チャップリンのようにお茶目なガード、かわいくて賢いジャンラン。サッカーがうまいチエッド、頑固で生意気なシモン、他にもたくさんのかわいい子たちばかりだった。

この村に学校をつくる、ということに関して、自分の気持ちをうまく言い表せない点も見えてきた。戦争の間、僕の両親はまだしも、僕の命をこの村の人たちが救ってくれたことを考えると、何とも言えない複雑な感情があつてうまく言葉にできない。だからこのことに関しては最小限に記しておこうと思う。村人と子供たちは、僕らがこの村に学校をつくっていることにとても感謝をしてくれていて、僕らも謙虚でいることができた。

僕の父には15人もの兄弟がいて、たった2人だけが生き残った。彼と、叔父のルン。叔父はカンボジアの北部、ウドンメンチェイ州の州都市、サムロン市に住んでいる。カンボジアという、世界でも最も対人地雷が残存している国の中でも、このサムロンという地域には特に集中して地雷が残っている。叔父には7人の子供がいて、他のカンボジアの家族と同じように高床式の木製の家に住んでいる。彼の家の前には小さいけどバナナの果樹園が広がっている。シェムリアップからサムロンまでの長い道のりは、これまでに経験したことのないくらい、笑って済まされないくらいのひどい旅行になった。

1979年に、僕の家族がカンボジアからタイの国境まで歩いて亡命をしたときに通ったのが、この街、サムロンだった。今回は素足ではなく、兄が使っている青いおんぼろの軽トラックで旅をした。車はオーボロだったけれど、マフラーはなんとか修理できた。大抵であれば、この世界一ひどいといつても言いくらいの道のりも、5時間ほど我慢すればサムロンまで着ける。普通の道のりとは全く違うことは一目見てわかった。道のどこもがでこぼこで、ひどい状態になっていた。空からスイカが降ってきて、道の真ん中3メートルごとに穴を開けたようだった。穴がない部分には地面のひび割れがあつて、道路全体が崩壊してい

た。そのせいで、どこかの峠を超える山道を走る気分になった。この道のりをずっとフォードのエクスプローラで行けるのだったら良かったけど、実際はサスペンションもない、軽トラックの荷台の上だった。

クッションを持ってきていたらどれだけ楽かと悔しく思っていたちょうどそのとき、何かの衝撃を感じて見上げると、空に真っ黒い雲が広がり、雷が鳴っていた。すぐに大きなプラスチックシートで自分たちを覆ったのは良いけど、車は溝にはまって動かなくなってしまった。ただでさえずっと座り続けて、おしりがひどく痛いというのに。すぐ出たいという気持ちに反して、実際には溝から出るのに2時間もかかってしまった。お寺の修行僧10人ではまったくトラックを動かそうとしても、トレーラーを出してきてもらってびくともせず、逆にトレーラーが溝にはまってしまった。暗くなつてやっと大型トラックが来て、僕たちの車は自由の身となった。そこはどこかのお寺の道の外れだったので、僕らの車が溝にはまったその5メートル前に、なんとおばあちゃんのお墓があったのだった。おばあちゃん、僕らに会いたがっていたんだろうな。ありがとう。

結局サムロンに着くまでに8時間もの道のりがかかつってしまった。着いた頃には、おしりに横一本の線が入つてしまつて、まるでオーブントースターで焼かれたみたいだった。その一回きりで終われば笑えて済ませたことだったけれど、次の日もまた同じことを繰り返すんだと思うと笑えなかった。

家庭によっては、夕飯の食卓で、過去の特別な家族行事を話して盛り上ることがあると思う。結婚式のこととか、子供が初めておしゃべりをしたこととか。そういう話は、僕の家族では一切なかつた。一切というのは間違いかもしれない。いつも、クリスマスに関することが話題になって、特にサリー家の次の世代についての話題は豊富だった。僕は、甥っ子と姪っ子が女王様のように写真ばかり撮られているのに文句を言っていた。けれどその会話の中で、僕らの過去が出てくることはなかった。過去のことはドアの向こうに閉ざされて、親たちによって築

かれた壁がその会話をさせてくれなかった。カンボジアに来たら、オーストラリアのときとは様子が変わるのがなと思っていた。地理的に違う場所に来て何かを期待していたけれど、結局どこにいたとしても、何も変わることはなかった。

僕のカンボジア旅行は予想はずれに終わった。すべてが想像と違っていた。これからも、新しい学校づくりのために何度もカンボジアに足をはこぶだろう。いつの日か、僕の家族の過去が、さらに明らかになればいいと思う。カンボジアの内戦のこと、それ以前のことについて話すのは、両親にとってとても辛いことだ。彼らが耐えてきたものは、まだ僕の想像の中にある。

でも両親がどう思おうと、僕は自分の答えを探し続けるだろう。ひとつ見つかると次を知りたくなる。僕にはそれまで何も知らされていなかった姉の存在があった。彼女は両親が初めて育てた長女で、13歳の時に亡くなった。彼女はどういう子だったんだろう？なぜ彼女の過去はすべて消されていて、なぜ生き残った子供たちは彼女のことを知らされなかつたんだろう？

今の僕は、ミツバチになりたがっていた少年とは違う。今のはうが知りたいことが山ほどあるけれど、今は大空を見上げていると、何かしらわかった気になれる。なぜかって、それは認めたくないけれど、僕も他人に教えられない秘密を持っているから。

